

14才少女の乳腺症の1例

大和高田市民病院外科（院長 杉本雄三博士）

杉 本 雄 三・倉 橋 道 男

〔原稿受付 昭和36年11月30日〕

A CASE OF 14 YEAR-OLD FEMALE'S MASTOPATHIE

by

YUZO SUGIMOTO and MICHIO KURAHASHI

From the Surgical Division, Yamatotakada City Hospital

A case of mastopathia cystica (or chronic cystic mastitis) in a 14-year-old female was reported.

The patient had a painless mass of 4 cm. in diameter in the lower outer quadrant of the left breast. The resected tumor showed a uniform white cut-surface and was completely encapsulated. Histologically, while stromal proliferation was predominant, there were areas of marked glandular hyperplasia as well as those of pronounced ductal proliferation. Neither pleomorphism nor mitosis was encountered.

Some of these features may suggest the possibility of fibroadenoma, but the diagnosis of mastopathia seems to be more consistent with the above findings.

乳腺症は普遍的な疾患であり、好発年齢は大体閉経期およびその前後とされている。われわれは14才未婚の少女の左乳房の無痛性腫瘤を摘出し、組織学的に乳腺症であることを確かめたので、報告する。

症 例

14才 女子。

主訴：左乳房無痛性腫瘤。

現病歴：約2年前から、左乳房下部に鳩卵大の無痛性腫瘤があるのに気付いていたが、苦痛がないため放置していた。しかし最近次第に大きくなり鶏卵大となったため来院す。初潮は13才の3月で、現在なお不順である。

現症：体格中等、栄養良好、皮下脂肪發育良好、皮膚正常、脈搏正、心臓、肺臓、腹部の理学的所見に苦変を認めない。乳房は發育良好で左右に發育の差異は認められない。左乳房の下部、中央線よりやや外側にかけて鶏卵大の腫瘤が触知される。弾性硬で圧痛なく、可動性である。表面の皮膚に発赤、異常光沢、熱感、

静脈怒張などは認められない。よつてこの腫瘤を摘出した。（写真1）腫瘤は周囲に被膜を有し、断面は白色一様である。

組織標本：一般に間質結合組織の増殖がみられ、一部には腺の著しい増殖がある。また他の部位では乳管の増生が著明で、さらに著しく拡大した乳管の内腔に向つて乳管上皮細胞が乳嚢状に増生している部分も見られる。標本全体としてはこれらの像が夫々に独立し、あるいは混在している。しかし異型および核分裂像は認められない（写真2, 3, 4）。

上記のように、全体として間質結合組織の増生の強い点是人により乳腺線維腫と見做されるかも知れぬが腺の増殖が著しい点からわれわれはこれを乳腺症と診断した。

考按：乳腺症は乳房の疾患では普遍的な疾患で、好発年齢は大体において閉経期およびその前後であり、藤森は60才以上の高令者および30才以下の若年者には発生しないといつている。組織学的所見は極めて多彩であり、Foote and Stewartによれば、乳管上皮増殖、嚢胞内乳嚢腫および乳管乳嚢症、閉塞性乳管増生症、



写真 1

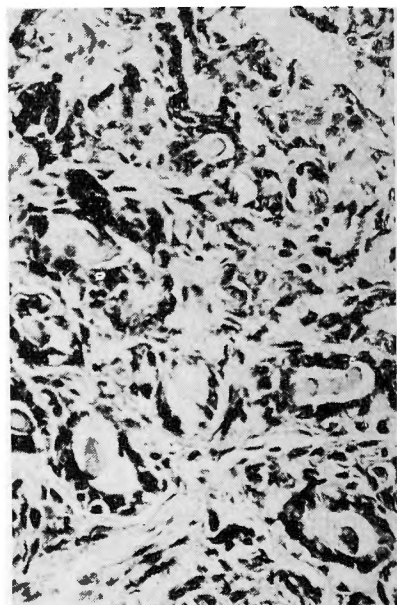


写真 3

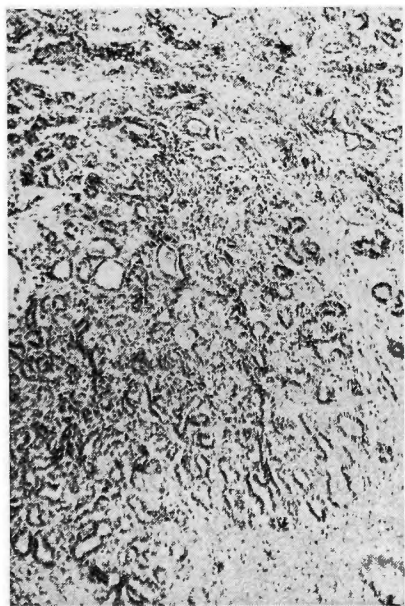


写真 2

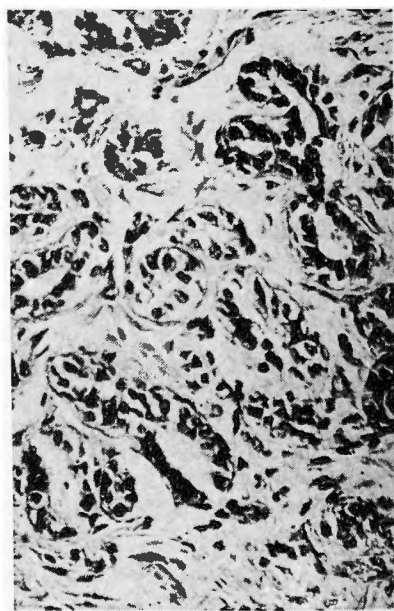


写真 4

アポクリン上皮，硬化性腺増生症，線維腺腫および線維腺腫形成傾向，嚢胞，乳管潴溜，乳管上皮化性，管周囲炎，脂肪壊死，小葉増生，管周囲筋様萎縮などの形態像が見られるが，このうち比較的特異性は頭初の5病変であるといっている。本症例は硬度が弾性硬な点，境界が非常に鮮明な点，被膜を有している点，又

単発している点，線維腺腫が20才前後から30才前後に多いなどの点からいえば，線維腺腫と考えられる面もあるが，その反面乳腺の著しい増殖，乳管の増生などの乳腺症の像をも呈してい，われわれは一応これを乳腺症と考えた。学者によれば乳腺症と線維腺腫との移行形をも指摘している人もあり，その境界を何処にお

くか種々議論のある所である。いずれにしても14才の少女に起ることは極めて稀であり本邦でかかる若年者の報告例は見当たらない。

結 語

われわれは14才の少女の左乳房に発生した無痛性腫瘤を摘出し、組織検査の結果、乳腺症の診断を得たので報告した。

本論文の要旨は昭和36年1月京都外科集談会席上で発表した。

本症例の組織学的所見について種々御教導を賜った奈良医大病理学教室北村旦教授、および教室員の方々に深謝の意を表します。

文 献

- 1) 藤森正雄：乳腺症の診断と治療，産科と婦人科，25，4，231，昭33.
- 2) 藤森正雄ほか：癌治療の進歩，第3集乳腺，医学書院，1，1，1951.
- 3) 木村信夫ほか：若年者に見られた出血乳房としての慢性嚢胞性乳腺の1例，東北医学雑誌，50，3，306，昭29.
- 4) 中村尚道ほか：乳腺症および乳腺線維腫例の組織像とその追跡，臨床病理，7，2，160，昭34.
- 5) 岡田孝男ほか：所謂乳腺症の病理，日本病理学会会誌，45，3，325，昭31.
- 6) 岡田孝男：所謂乳腺症の病理，日本病理学会会誌，43，総会号，350，昭29.
- 7) 梅原裕ほか：癌と紛はしい乳房腺腫の1例，臨床病理，7，2，148，昭34.
- 8) 米沢猛ほか：乳腺症の研究，日本病理学会会誌，43，総会号，348，昭29.

胃癌手術後4年半して直腸癌を発病した1例

淀通信病院外科（部長：世良敏行博士）

安 本 裕・山 中 敏 彦

〔原稿受付 昭和37年1月9日〕

A CASE OF CANCER OF RECTUM DEVELOPED 4.5 YEARS AFTER GASTRECTOMY FOR CANCER OF STOMACH

by

YUTAKA YASUMOTO, TOSHIHIKO YAMANAKA

YODO Communications Hospital, Surgical Clinic.

(Surgeon-in-chief: Dr. TOSHIYUKI SERA)

A male of 43 years old complaining of bloody excrements was admitted to our clinic on Dec. 19, 1960, who had been suffered from gastric cancer (adenocarcinoma) for which gastrectomy and gastrojejunostomy has been carried out on July 23, 1956.

Roentgenoscopy of rectum in use of barium was performed and stenosis of rectum was found. Anoscopy gave a tumor of rectum at the site 5cm from the anus. Microscopic feature of exploratory excision of this tumor was adenocarcinoma.

In the laparotomy performed immediately thereafter, there were found any abnormalities of peritoneum of Douglas' space and sigmoid colon, but a tumor in rectum. Then, amputatio recti was successfully carried out. Postoperative course was uneventful.

Subordinate connections between both cancers were not found. Therefore, it was considered to be a rare case with 2 cancers which grew at different times individually.

癌治療の進歩にともない、一つの癌の治療後に、別の癌の発生をみた報告がなされているが、このような